

# 母乳育児に対する母親と父親の意識

室津 史子

The Difference of Consciousness and Considerations between  
Fathers and Mothers on Breast-Feeding

Fumiko Murotsu

キーワード：母乳育児 意識 母親と父親

Keywords：Breast-Feeding Consciousness and Considerations Fathers and Mothers

## 要約

核家族化した現代の育児において、父親の果たす役割は大きく父親への支援について考えることは母子保健分野において重要なことである。それは、母親が主体となる母乳育児においても同様と考える。そこで本研究では、母乳育児における母親と父親の意識について検討した。

調査は、1歳6か月児健康診査に来所し、調査に協力の得られた287組を対象として、無記名自記式質問紙調査を行った。調査内容は、対象の属性と先行文献を参考に作成した母乳育児像についての31の質問項目である。母乳育児像については、母親・父親別に因子分析を行った。

その結果、母親の母乳育児像においては、『母の満足・幸福』、『母乳育児志向』、『母乳育児の簡便さ・楽しさ』、『母乳の利点』、『母乳育児の方法』の5つの因子が抽出された。父親の母乳育児像においては、『母子を見守る満足』、『母乳育児志向』、『母乳の利点』、『母乳育児の簡便さ』、『妻の満足』の5つの因子が抽出された。質問項目別に平均得点で比較すると、父親よりも母親の得点が高い項目が多かったが、母乳育児を支えることは夫のつとめであるという意識は母親よりも父親の方が高かった。

母乳育児に対する母親と父親の意識は、共通するキーワードをふくみながら、異なる因子構造が示された。母親の意識が、実施者である自分自身と子どもとの相互作用に向くものに対して、父親の意識は、妻への思いやりや子どもへの利益といった拡がりをもつことが示唆された。

## I. 緒言

育児の中で母子関係を考える時に、母乳育児については多くが着目するところである。母乳育児の最大の長所は母子相互作用が順調に促進される<sup>1)</sup>ことであるが、この母乳育児においても父親の役割があるのではないだろうか。健やか親子21においても、出産後1か月時の母乳育児の割合増加が目標の一つとされるなど、現在も母乳育児を推進することが求められており、母乳育児については母子保健分野において介入すべき課題の一つでもある。従来は子育て、つまり育児といえば母親主体で語られがちであったものが、母親のみでなく父親も含めて検討されるようになってきた。父親の育児行動は、子どもの社会性などの発達に重要な影響を与える<sup>2)</sup>といわれ、育児における父親の役割についての研究<sup>3,4)</sup>もなされるようになった。二宮ら<sup>5)</sup>は、母乳育児を継続している母親は、生後3か月までに中断した母親に比べ、父親に満足している母親が多いことや、生後3か月以後も母乳を継続し

ている群に父親の学習の場への参加が多いと報告している。夫婦共同の育児を考える時、母乳育児における父親への支援も重要といえる。しかし、母乳育児は身体的な性役割の部分において、父親が全面的に母親にとって代わるのでできないものである。したがって、母親の代わりに母乳を飲ませるといような直接的な育児の分担ではなく、母乳育児をする母親を支えることが父親に期待される役割といえる。核家族が母乳育児を困難にする家族要因の一つであり<sup>6)</sup>、育児は夫婦で分担するものと父親が考えている夫婦においては育児不安度が低い<sup>7)</sup>といった報告もあり、母乳育児についても母親の努力だけではなく、それを支える父親の意識や具体的援助が影響すると考えられる。

育児が社会や文化による影響を受けるように、わが国の母乳育児の状況も大きく変化してきた。母乳育児の継続と親による児への虐待などの社会問題との関連についての研究<sup>8)</sup>もあり、母乳育児を支えるために必要な保健指導は時代に即していることが必要である。

また母乳を与える母親が予想以上に困難に出会い気持ちが動揺することは、臨床的によく観察されることであり<sup>9)</sup>、入院中の医療者の協力体制、母親の意志、家族の理解と協力の3点が重要であるといわれている。1989年ユニセフ/WHOは「母乳育児成功のための10カ条」<sup>10)</sup>を共同勧告し、今も地球規模の啓蒙活動が行われている。しかし、母親が母乳で育てたいと思っても育児によるストレスや母乳不足感から人工ミルクを補足してしまうことが考えられ、エモーションナルサポートが必要となる。それには、分娩後一週間程度の入院期間における医療者のサポートはもちろんではあるが、退院後も継続したサポートがなされることが望ましい。特に、母乳栄養が7割であった昭和35年頃と比較して核家族世帯の増加はあきらかであり、育児の協力者あるいは担い手として父親の果たす役割は大きいと思われる。

そこで、母乳育児における母親と父親の意識について検討することとした。本研究の目的は、母乳育児に対する父親と母親の意識の違いについてあきらかにすることである。

## II. 研究方法

### 1. 調査対象

調査対象は、A県B市に在住し、1歳6か月健康診査の対象となる子どもの親467組である。調査対象を1歳6か月健康診査の対象となる子どもをもつ親とした理由は、児の月齢がほぼ統一されていることと、卒乳の時期を考慮して、対象者が栄養法を振り返りやすいと考えたからである。

A市保健センターにおける1歳6か月健康診査は毎月1回実施されており、1回の対象者は約80～100名である。

### 2. 調査期間

調査期間は、平成16年8月～12月である。

### 3. 調査内容

調査は、無記名自記式質問紙法を用いた。

調査項目は、対象の属性(年齢、性別、母親の就労状況、子どもの栄養法)、母乳育児像である。

母乳育児像については、先行研究<sup>12,13)</sup>を参考に研究者自身が作成した質問紙を用いた。質問項目は31項目で、母乳育児に関する項目について1.「全く思わない」、2.「あまり思わない」、3.「どちらでもない」、4.「ややそう思う」、5.「非常にそう思う」とし、リッカート尺度の5段階評定とした。

### 4. 分析方法

対象者の属性については単純集計をおこなった。

母乳育児像についての質問紙は、質問項目ごとに1～5点を配点していた。因子分析をする場合に、得点が高いほど母乳育児についての意識や知識が高いという方向性を持たせるために、国際的に認められた母乳育児支援団体であるラ・レーチェリーグの母乳育児に対する考え方を参考に、母乳で足りているかどうか不安である、母乳は時間を決めて飲ませるとよい、母乳を飲ませることは辛いという、母乳育児をすると眠れない、の4つの質問項目を逆転項目とした。母乳育児像31項目について、父親と母親別に主因子法プロマックス回転による因子分析をおこなった。因子分析の過程においては、すべての因子において固有値1.00以上であり、スクリープロットを参考にしながら、因子負荷量が絶対値0.30以上となり、解釈も可能となった時点で因子分析を終了した。信頼性に関しては、質問紙全体および因子ごとにCronbach's  $\alpha$  係数を求めた。

次に、質問項目による父親と母親の意識の違いについては、それぞれの項目の平均点により比較した。差の検定には対応のあるサンプルのt検定をおこなった。統計学的有意水準を5%以下とし、統計解析にはSPSS14.0 J for Windowsを使用した。

### 5. 倫理的配慮

B市保健センターへ出向き、研究の目的および方法について説明し、協力が得られるようお願いした。協力依頼は所長および実際に1歳6か月健康診査を担当する保健師の方々に対しておこなった。また、対象者への調査票の配付や回収方法については担当保健師と相談の上で決定した。さらに、調査票については担当保健師4名でプレテストを行い、対象者に適した言語表現に変更するという手順を踏んだ。

対象者へは、調査票とともに研究の主旨、分析方法、匿名性の確保について記した文書と、父親と母親用の封筒を同封した。協力が得られる場合は、お互いに相談しないで記入してほしい旨を書き添えた。また、記入した調査票については、父親と母親用の封筒に別々に入れ、閉封して1歳6か月健康診査の際に持参していただくように文書で説明した。案内資料と調査票は、1歳6か月健康診査が実施される2～3週間前に対象者へ郵送した。その後、1歳6か月健康診査のために保健センターへ来所された時に回収し、記入された調査票を持参していただくことをもって研究への同意とした。

## Ⅲ. 研究結果

### 1. 対象者の背景

対象者の背景については表1に示した(表1)。

事前に郵送した調査票は467組であり、1歳6か月健康診査時の回収率は287組(61.46%)であった。このうち有効回答数は243組(52.03%)であった。有効回答から除外したものは、父親と母親の両方が揃っていないものと、全く記入されていないもの(2組)である。父親・母親の両方が揃っていない理由について、仕事による夫の不在を回収時に口頭で伝えられたものと調査票にその旨が記入されたものがあつた。

対象者の平均年齢は、父親：32.0±5.6歳、母親：29.9±6.0歳であつた。対象児の出生順位は、第1子：139名(57.20%)、第2子：81名(33.33%)、第3子：23名(9.47%)であつた。母親の平均年齢について、子どもの出生順位別にみると、第1子：28.9±4.3歳、第2子：31.7±4.3歳、第3子：34.6±4.7歳であつた。平均結婚年数は、4.6±2.7年であつた。

父親の職業は、会社員163名(67.64%)、公務員21名(8.71%)、製造業13名(5.39%)、その他44名(18.26%)、無回答2名であつた。家族形態は、核家族208組(85.60%)、拡大家族35組(14.40%)であつた。子どもの性別は、男の子133名(54.73%)、女の子110名(45.27%)であつた。

母親の就労状況については、専業主婦175名(72.31%)、パートタイム26名(10.75%)、定

職あり41名(16.94%)，無回答1名であった。

子どもの栄養法については，母乳栄養84名(34.85%)，混合栄養141名(58.51%)，人工栄養16名(6.64%)，無回答2名であった。対象となった児が第1子である場合と第2子以降である場合の栄養法について比較をおこなった。差の検定をおこなうために $\chi^2$ 検定をおこなったが有意差はみられなかった。

表1 対象の属性 n=243

属 性	項 目	名 (%) 斜体は平均値±SD
対象者の年齢	父親	<i>32.0 ± 5.6 歳</i>
	母親	<i>29.9 ± 6.0 歳</i>
結婚年数		<i>4.6 ± 2.7 年</i>
子どもの性別	男	133(54.73)
	女	110(45.27)
出生順位	第1子	139(57.20)
	第2子	81(33.33)
	第3子	23( 9.47)
父親の職業	会社員	163(67.64)
	公務員	21( 8.71)
	製造業	13( 5.39)
	その他	44(18.26)
母親の就労	定職あり	41(16.94)
	パートタイム	26(10.75)
	専業主婦	175(72.31)
家族形態	核家族	208(85.60)
	拡大家族	35(14.40)
子どもの栄養法	母乳栄養	85(35.12)
	混合栄養	141(58.27)
	人工栄養	16( 6.61)

## 2. 母乳育児像についての因子分析

母親の母乳育児像で抽出された因子は5因子であった(表2)。因子分析の結果については表2に示した。第Ⅰ因子は，母乳を飲ませることは幸せである・母乳育児は母と子のきずなが深まる・母乳育児はスキンシップが図れる・母乳は赤ちゃんの満足度が高い，などの12項目で「母の満足・幸福」とした。Cronbach's  $\alpha$  係数は0.87であった。第Ⅱ因子は，妊娠してから絶対母乳で育てたいと思っていた・妊娠する前から絶対母乳で育てたいと思っていた・子どもが生まれてから絶対母乳で育てたいと思った，の3項目で「母乳育児志向」とした。Cronbach's  $\alpha$  係数は0.92であった。第Ⅲ因子は，母乳を飲ませることは楽しい・乳房の手入れは簡単である・母乳育児は手間がかからず簡単である，などの7項目で「母乳育児の簡便さ・楽しさ」とした。Cronbach's  $\alpha$  係数は0.74であった。第Ⅳ因子は，母乳には免疫が多く含まれている・母乳には赤ちゃんにあった十分な栄養が含まれている，などの4項目で「母乳の利点」とした。Cronbach's  $\alpha$  係数は0.43であった。第Ⅴ因子は，母乳は赤ちゃんが泣いたら飲ませるものであると母乳は時間を決めて飲ませるとよいの2項目で「母乳育児の方法」とした。Cronbach's  $\alpha$  係数は0.52であった。質問紙全体の

表2 母親の母乳育児像

n=243

項 目	因子負荷量					共通性
	I	II	III	IV	V	
<b>母乳育児像 <math>\alpha = 0.88</math></b>						
<b>第 I 因子《母の満足・幸福》<math>\alpha = 0.87</math></b>						
母乳を飲ませることは幸せである (幸せそうだ)	0.74	0.47	0.64	0.26	0.10	0.63
母乳育児は母と子のきずなが深まる	0.73	0.37	0.50	0.25	0.33	0.56
母乳育児はスキンシップが図れる	0.69	0.36	0.44	0.34	0.41	0.51
母乳は赤ちゃんの満足度が高い	0.69	0.38	0.60	0.38	0.31	0.52
母乳を飲ませることは母親のつとめである	0.66	0.30	0.32	0.32	0.12	0.48
母乳を飲ませるべきである	0.65	0.37	0.33	0.49	0.42	0.52
赤ちゃんは母乳をほしがるものである	0.65	0.35	0.43	0.34	0.34	0.44
母乳育児は安心である	0.64	0.19	0.51	0.60	0.37	0.54
母乳育児は自然なことである	0.59	0.25	0.42	0.50	0.39	0.42
母乳は赤ちゃんの頭がよくなる	0.50	0.20	0.31	0.25	0.11	0.26
母乳育児だと赤ちゃんはよく眠る	0.43	0.28	0.33	0.26	-0.05	0.25
母乳育児を支えることは夫としてのつとめである	0.43	0.28	0.19	0.11	0.06	0.23
<b>第 II 因子《母乳育児志向》<math>\alpha = 0.92</math></b>						
妊娠してから、絶対母乳で育てたい (育ててほしい) と思っていた	0.46	0.99	0.32	0.24	0.10	0.99
妊娠する前から、絶対母乳で育てたい (育ててほしい) と思っていた	0.44	0.85	0.28	0.25	0.04	0.74
子どもが生まれてから、絶対母乳で育てたい (育ててほしい) と思った	0.59	0.83	0.47	0.27	0.19	0.73
<b>第 III 因子《母乳育児の簡便さ・楽しさ》<math>\alpha = 0.74</math></b>						
母乳を飲ませることは楽しい (楽しそうだ)	0.59	0.47	0.76	0.29	-0.11	0.69
乳房の手入れは簡単である	0.36	0.17	0.66	0.31	0.26	0.50
母乳育児は手間がかからず簡単である	0.43	0.32	0.59	0.50	0.16	0.43
母乳育児は清潔である	0.50	0.15	0.56	0.46	0.28	0.41
母乳を飲ませることは辛い (辛そうだ)	0.33	0.29	0.56	0.24	-0.11	0.36
夫は私が (私は妻が) 母乳を飲ませることに積極的である	0.49	0.37	0.50	0.15	0.28	0.36
入院中に母乳はよく出た	0.20	0.00	0.33	0.02	0.07	0.15
母乳では足りているかどうか不安である	0.14	0.00	0.25	0.07	0.10	0.08
自分にとって満足できるお産だった	0.07	0.03	0.23	0.15	0.08	0.08
<b>第 IV 因子《母乳の利点》<math>\alpha = 0.43</math></b>						
母乳には免疫が多く含まれている	0.25	0.20	0.20	0.58	0.13	0.35
母乳には赤ちゃんにあった十分な栄養がふくまれている	0.24	0.12	0.17	0.55	0.11	0.31
母乳は経済的である	0.19	0.21	0.25	0.45	0.03	0.24
母乳は赤ちゃんがアレルギーになる心配がない	0.16	-0.07	0.16	0.31	0.04	0.13
<b>第 V 因子《母乳育児の方法》<math>\alpha = 0.52</math></b>						
母乳は赤ちゃんが泣いたら飲ませるものである	0.32	0.09	0.22	0.20	0.49	0.27
母乳は時間を決めて飲ませるとよい	0.00	0.09	0.02	0.00	0.36	0.19
母乳育児をすると眠れない	-0.13	0.04	-0.07	-0.05	-0.25	0.07
固有値	8.25	2.16	1.72	1.64	1.46	
寄与率 (%)	26.62	6.96	5.55	5.28	4.71	
累積寄与率 (%)	26.62	33.59	39.13	44.41	49.12	

Cronbach's  $\alpha$  係数は0.88であり内的整合性がみられた。母親の母乳育児像における5因子の累積寄与率は49.12%であった。

母親の因子分析において、因子負荷量が0.30未満で因子にふくまれない項目は、母

乳では足りているかどうか不安である・自分にとって満足できるお産だった・母乳育児をすると眠れない, の3項目であった。

父親の母乳育児像で抽出された因子は5因子であった(表3)。因子分析の結果について

表3 父親の母乳育児像

n=243

項 目	因子負荷量					共通性
	I	II	III	IV	V	
<b>母乳育児像 <math>\alpha = 0.89</math></b>						
<b>第I因子《母子を見守る満足》<math>\alpha = 0.84</math></b>						
母乳は赤ちゃんの満足度が高い	0.76	0.36	0.42	0.53	0.34	0.61
母乳育児は安心である	0.72	0.42	0.69	0.50	0.22	0.65
母乳育児はスキンシップが図れる	0.72	0.23	0.49	0.23	0.29	0.56
夫は私が(私は妻が)母乳を飲ませることに積極的である	0.68	0.41	0.45	0.45	0.35	0.48
母乳育児は母と子のきずなが深まる	0.67	0.24	0.56	0.28	0.30	0.50
赤ちゃんは母乳をほしがめるものである	0.66	0.32	0.38	0.33	0.21	0.44
母乳育児だと赤ちゃんはよく眠る	0.53	0.32	0.16	0.46	0.34	0.38
母乳育児を支えることは夫としてのつとめである	0.50	0.35	0.46	0.16	0.31	0.33
自分にとってお産は満足できるものだった	0.32	0.05	0.28	0.05	0.20	0.15
母乳では足りているかどうか不安である	0.24	0.07	0.10	0.01	0.11	0.08
<b>第II因子《母乳育児志向》<math>\alpha = 0.96</math></b>						
妊娠する前から、絶対母乳で育てたい(育ててほしい)と思っていた	0.39	0.95	0.30	0.32	0.22	0.91
妊娠してから、絶対母乳で育てたい(育ててほしい)と思っていた	0.36	0.94	0.29	0.32	0.26	0.91
子どもが生まれてから、絶対母乳で育てたい(育ててほしい)と思った	0.43	0.91	0.34	0.35	0.33	0.83
母乳育児をすると眠れない	-0.04	-0.13	-0.04	-0.12	0.13	0.06
<b>第III因子《母乳の利点》<math>\alpha = 0.81</math></b>						
母乳を飲ませるべきである	0.69	0.42	0.72	0.36	0.28	0.63
母乳には赤ちゃんにあった十分な栄養がふくまれている	0.36	0.16	0.64	0.20	0.18	0.42
母乳育児は自然なことである	0.62	0.38	0.64	0.30	0.28	0.50
母乳には免疫が多く含まれている	0.38	0.17	0.64	0.25	0.25	0.42
母乳育児は清潔である	0.51	0.31	0.62	0.37	0.26	0.42
母乳は赤ちゃんがアレルギーになる心配がない	0.33	0.36	0.60	0.32	0.12	0.42
母乳を飲ませることは母親のつとめである	0.43	0.34	0.44	0.32	0.11	0.27
<b>第IV因子《母乳育児の簡便さ》<math>\alpha = 0.70</math></b>						
母乳育児は手間がかからず簡単である	0.26	0.23	0.23	0.71	0.24	0.54
乳房の手入れは簡単である	0.21	0.16	0.17	0.57	0.10	0.34
母乳は赤ちゃんが泣いたら飲ませるものである	0.41	0.31	0.12	0.56	0.11	0.38
母乳は経済的である	0.33	0.21	0.37	0.55	0.20	0.35
母乳は赤ちゃんの頭がよくなる	0.40	0.47	0.26	0.48	0.18	0.33
母乳は時間を決めて飲ませるとよい	-0.12	-0.07	-0.16	-0.29	-0.08	0.10
<b>第V因子《妻の満足》<math>\alpha = 0.78</math></b>						
母乳を飲ませることは楽しい(楽しそうだ)	0.49	0.37	0.30	0.39	0.94	0.89
母乳を飲ませることは幸せである(幸せそうだ)	0.50	0.33	0.34	0.36	0.80	0.67
母乳を飲ませることは辛い(辛そうだ)	0.15	0.11	0.12	0.07	0.49	0.24
入院中に母乳はよく出た	0.23	0.18	0.19	0.18	0.23	0.08
固有値	8.66	2.36	1.89	1.82	1.48	
寄与率(%)	27.93	7.61	6.11	5.86	4.79	
累積寄与率(%)	27.93	35.54	41.65	47.51	52.30	

は表3に示した。第I因子は、母乳は赤ちゃんの満足度が高い・母乳育児は安心である・母乳育児はスキンシップが図れる・自分は妻が赤ちゃんに母乳を飲ませることに積極的だ、などの9項目で「母子を見守る満足」とした。Cronbach's  $\alpha$  係数は0.84であった。第II因子は、妊娠する前から絶対母乳で育ててほしいと思っていた、などの3項目で「母乳育児志向」とした。Cronbach's  $\alpha$  係数は0.96であった。第III因子は、母乳を飲ませるべきである・母乳には赤ちゃんにあった十分な栄養が含まれている・母乳育児は自然なことである・母乳には免疫が多く含まれている、などの7項目で「母乳の利点」とした。Cronbach's  $\alpha$  係数は0.81であった。第IV因子は、母乳育児は手間がかからず簡単である・乳房の手入れは簡単である・母乳は赤ちゃんが泣いたら飲ませるものである、などの5項目で「母乳育児の簡便さ」とした。Cronbach's  $\alpha$  係数は0.70であった。第V因子は、母乳を飲ませることは楽しそうだ・母乳を飲ませることは幸せそうだ・母乳を飲ませることは辛そうだ、の3項目で「妻の満足」とし、Cronbach's  $\alpha$  係数は0.78であった。質問紙全体のCronbach's  $\alpha$  係数は0.89であり内的整合性がみられた。父親の母乳育児像における5因子の累積寄与率は52.30%であった。

父親の因子分析において、因子負荷量が0.30未満で因子にふくまれない項目は、母乳では足りているかどうか不安である・母乳育児をすると眠れない・母乳は時間を決めて飲ませるとよい・入院中に妻の母乳はよく出た、の4項目であった。

### 3. 質問項目ごとにみる母親と父親の意識の違い

質問項目別に母親と父親の平均得点を比較した結果については表4に示した(表4)。

母親では、平均得点が最も高かった項目は「母乳には免疫が多く含まれている」と「母乳は経済的である」の2項目で4.7点であった。平均得点が4.0点以上であった項目は「母乳には免疫が多く含まれている」「母乳は経済的である」「母乳には赤ちゃんにあった十分な栄養がある」「母乳育児はスキンシップが図れる」「母乳育児は母と子のきずなが深まる」「母乳育児は自然なことである」「母乳を飲ませることは幸せである」「母乳を飲ませるべきである」「母乳育児は安心である」「妊娠してから絶対母乳で育てたいと思っていた」の10項目であった。逆に、平均得点が最も低かった項目は「母乳を飲ませることは辛い」で2.2点であった。2.0点未満である項目はなく、3.0点未満の項目が3項目あり「母乳を飲ませることは辛い」「母乳は赤ちゃんの頭がよくなる」「母乳育児だと赤ちゃんがよく眠る」であった。

父親では、平均得点が最も高かった項目は「母乳には免疫が多く含まれている」と「母乳には赤ちゃんにあった十分な栄養がある」の2項目で4.5点であった。平均得点が4.0点以上であった項目は「母乳には免疫が多く含まれている」「母乳には赤ちゃんにあった十分な栄養がある」「母乳育児は母と子のきずなが深まる」「母乳育児はスキンシップが図れる」「自分にとって満足できるお産だった」「母乳育児は自然なことである」「母乳を飲ませるべきである」「母乳は経済的である」の8項目であった。逆に、平均得点が最も低かった項目は「母乳を飲ませることは辛そうだ」で2.5点であった。2.0点未満である項目はなく、3.0点未満の項目が3項目あり「母乳を飲ませることは辛そうだ」「母乳育児をすると眠れない」「乳房の手入れは簡単である」「母乳は赤ちゃんの頭がよくなる」であった。

母親と父親の平均得点を比較して差がみられた項目は、31項目中23項目あり、23項目の中で16項目は母親の平均得点が高く、7項目については父親の平均得点が高かった。

母親と父親ともに平均得点が4.0点以上の項目の中で比較して差がみられたものは、「母乳には赤ちゃんにあった十分な栄養がある」[ $t(239)=4.24, p<0.05$ ], 「母乳には免疫が多く含まれる」[ $t(236)=4.23, p<0.05$ ], 「母乳育児は経済的である」[ $t(236)=9.04, p<0.05$ ],

表4 質問項目別にみた母親と父親の意識

n=243

項 目	平均得点		対応のある t 検定 有意確率 (両側)		t 値	自由度
	母親	父親				
1. 母乳には赤ちゃんにあった十分な栄養がある	4.6 ± 0.6	4.5 ± 0.7	0.000	*	4.24	239
2. 母乳は赤ちゃんがアレルギーになる心配がない	3.4 ± 1.1	3.6 ± 1.0	0.015	*	-2.46	236
3. 母乳には免疫が多くふくまれる	4.7 ± 0.5	4.5 ± 0.7	0.000	**	4.23	236
4. 母乳は経済的である	4.7 ± 0.6	4.1 ± 1.0	0.000	**	9.04	236
5. 母乳育児は手間がかからず簡単である	3.9 ± 1.1	3.2 ± 1.1	0.000	**	8.05	236
6. 母乳育児は母と子の絆が深まる	4.5 ± 0.7	4.4 ± 0.8	0.021	*	2.32	236
7. 乳房の手入れは簡単である	3.5 ± 1.1	2.8 ± 1.0	0.000	**	7.84	236
8. 母乳育児は清潔である	3.6 ± 0.9	3.5 ± 0.9	0.358		0.92	236
9. 母乳育児は自然なことである	4.4 ± 0.8	4.3 ± 0.8	0.374		0.89	235
10. 母乳を飲ませるべきである	4.1 ± 0.9	4.2 ± 0.9	0.227		-1.21	236
11. 母乳育児は安心である	4.0 ± 0.9	3.9 ± 0.9	0.204		1.27	236
12. 母乳育児はスキンシップが図れる	4.6 ± 0.7	4.4 ± 0.8	0.000	**	4.40	236
13. 母乳は赤ちゃんの満足度が高い	3.9 ± 1.0	3.9 ± 1.0	1.000		0.00	236
14. 母乳育児だと赤ちゃんはよく眠る	2.8 ± 1.1	3.3 ± 1.0	0.000	**	-5.89	235
15. 母乳は赤ちゃんの頭がよくなる	2.7 ± 0.9	2.8 ± 1.0	0.017	*	-2.40	236
16. 母乳では足りているか不安である	3.8 ± 1.0	3.2 ± 1.0	0.000	**	7.37	235
17. 赤ちゃんは母乳をほしがるものである	3.7 ± 1.0	3.8 ± 0.9	0.206		-1.27	235
18. 母乳は赤ちゃんが泣いたらのませるものである	3.4 ± 1.1	3.0 ± 1.0	0.000	**	4.29	233
19. 母乳は時間を決めて飲ませるとよい	3.0 ± 1.0	3.4 ± 1.0	0.000	**	-4.19	233
20. 母乳を飲ませることは幸せだ(幸せそうだ)	4.3 ± 0.9	3.8 ± 1.0	0.000	**	6.11	234
21. 母乳を飲ませることは楽しい(楽しそうだ)	3.9 ± 1.0	3.7 ± 1.0	0.009	*	2.62	235
22. 母乳を飲ませることは辛い(辛そうだ)	2.2 ± 1.0	2.5 ± 1.0	0.005	*	-2.83	234
23. 母乳を飲ませることは母親のつとめである	3.7 ± 1.0	3.5 ± 1.0	0.023	*	2.29	234
24. 母乳育児を支えることは夫としてのつとめである	3.3 ± 1.0	3.8 ± 1.0	0.000	**	-6.12	235
25. 母乳育児をすると眠れない	3.1 ± 1.2	2.6 ± 1.1	0.000	**	4.66	234
26. 妊娠する前は絶対母乳で育てたい(育ててほしい)と思っていた	3.8 ± 1.1	3.0 ± 1.0	0.000	**	8.80	235
27. 妊娠してから絶対母乳で育てたい(育ててほしい)と思っていた	4.0 ± 1.1	3.0 ± 1.0	0.000	**	10.72	234
28. 子どもが生まれてから絶対母乳で育てたい(育ててほしい)と思った	3.9 ± 1.1	3.0 ± 1.0	0.000	**	10.47	234
29. 入院中に母乳はよく出た	3.3 ± 1.4	3.2 ± 1.2	0.082		1.75	233
30. 自分にとって満足できるお産だった	3.8 ± 1.1	4.2 ± 1.0	0.000	**	-4.82	233
31. 夫は私が(私は妻が)母乳を飲ませることに積極的だ	3.6 ± 1.1	3.6 ± 1.0	0.652		0.45	235

\*\* : p&lt;0.001, \* : p&lt;0.05

「母乳育児は母と子のきずなが深まる」〔t (236)=2.32, p<0.05〕, 「母乳育児はスキンシップが図れる」〔t (236)=4.40, p<0.05〕の5項目であった。この5項目はすべて父親よりも母親の方が平均得点は高いという結果であった。また、母親と父親ともに平均得点が3.0点未満の項目の中で比較して差がみられたものは、「母乳を飲ませることは辛い(辛そうだ)」〔t (234)=-2.83, p<0.05〕, 「母乳は赤ちゃんの頭がよくなる」〔t (239)=4.24, p<0.05〕であった。この2項目はいずれも母親よりも父親の方が平均得点は高いという結果であった。

#### IV. 考察

##### 1. 対象の特性

わが国の平成17年度における出生順位別の母親の平均年齢は、第1子が28.2歳、第2子30.3歳、第3子32.2歳である。本研究の対象となった母親の年齢は、約1年6か月前を出産時の年齢と考えると、すべての出生順位においてほぼ一致している。また、夫婦の年齢差についても同様に平均的な集団である。父親の職業や対象とした子どもの性別にも大きな偏りはみられない。

母親の就業状況については、平成17年度における末子の年齢階級別、子どものいる世帯の母親の就業<sup>11)</sup>をみると、子どものいる世帯総数を100%として、末子の年齢が0～3歳では、非労働力人口は66.7%であり、就業者は32.1%である。本研究の対象者では、専業主婦が72.31%、パートタイムの母親と定職ありの母親を合わせると、27.69%である。地域による差なども考えられるが、ほぼ平均的な集団と思われる。

生後6か月時の子どもの栄養状況をみると、平成17年度の全国調査において、母乳栄養は34.7%、混合栄養25.9%、人工栄養39.4%である<sup>12)</sup>。すべての妊婦が「わが子には我が乳で」の期待があっても、現代の女性が置かれている社会、人生価値観、パートナーとの関係などが、その行く手を遮ることにもなりかねず、50%を前後するわが国の母乳率は当然の結果かもしれない。本研究の対象者をみると、混合栄養が58.51%と高い。混合栄養の割合が高いという点は、児の発育・発達にともなって母乳不足感を感じる母親が人工ミルクを補足することや、祖母などによる周囲からの影響が考えられる。昭和40～50年に母親となり育児をしている年代の支援者、特に母親（祖母）の母乳育児意識によっては、混合栄養へ移行しやすいという指摘や核家族の方が祖父母との同居の母親に比べて精神健康度が高い<sup>13)</sup>という報告もある。母乳代替品として人工ミルクがあらわれ、ミルクで育てた子どもは賢いとか育ちがよいといった風評のなかで、人工栄養であることが、かっこいい子育てであるような育児環境で子育てをした時代もあった。昭和50～60年代の母親たちの子どもの栄養法についての考えには、そのような時代背景が推察される。今回は、祖父母までの調査はできていないため、分析には至っていないが、周囲にいる身近な支援者の母乳育児意識について検討していくことも課題である。

また、人工栄養の割合は6.64%と低い。南部<sup>14)</sup>は、ヒト動物の世界では100%に母乳栄養が果たせないのは宿命的で、ほぼ10～20%は混合栄養、人工栄養を余儀なくされると述べている。母乳育児の経験についていえば、成功した場合には次回にもよい方向が望めるが、成功しなかったという経験は同様に次回の母乳育児を阻む要因となりうる。Janke<sup>15)</sup>は、母乳育児の推進を予見する因子として、前回の母乳育児の経験がないことを明らかにしている。本研究では、対象児が第1子である場合と第2子以降である場合の栄養法の違いに有意差はみられず、前回の栄養法による影響についてはあきらかではない。ただ、第1子である場合も第2子以降である場合も、ともに人工栄養の割合が低い点は、本集団の特徴である。母乳育児が成功した場合にはセルフエスティームが高まり、経験を次回に役立てやすいが、母乳育児が成功しなかったという経験はあきらめとなる<sup>16)</sup>。そうした女性は自分を責めるあまり、母親としての自分に自信が持てず、自分の落ち度から同じ失敗を繰り返すのではないかということを経験に恐れる。そのために、仮に失敗しても自分が傷つくことを避けるように、先回りして母乳育児ができない正当な理由をあらかじめ見つけようとするのかもしれない。母乳育児でなかった母親にとっては、母乳が望ましいと感じられる質問に答えることは気が重いと推察できる。したがって、人工栄養であった方の研究協力が得られ難く、対象に偏倚があったことも考えられる。

## 2. 母乳育児像

母乳育児像の因子構造において、母親と父親に共通してみられるものは、「母乳の利点」と「母乳育児志向」の2因子である。しかし、「母乳の利点」という因子に含まれている下位尺度をみると、父親は、母乳育児は自然なことであり清潔で母親として飲ませるべきものとしてとらえているが、母親は母乳そのものの利点としての下位尺度となっている。

また、母親・父親の第Ⅰ因子には「満足」という共通するキーワードがふくまれているが、母親には母乳を飲ませる楽しさや飲ませることは母親のつとめであるという、父親にはみられない母乳育児の主体としての意識がうかがえる。これは、母親の第Ⅲ因子においても同様であり、母乳育児の楽しさは簡便さとともにみられている。

父親の第Ⅰ因子である「母子をみまもる満足」には、母乳は赤ちゃんの満足度が高いとか安心であるといった、主に子どもにとっての利益として母乳育児を捉えている。また、第Ⅴ因子である「妻の満足」は、母乳を飲ませることは幸せそうだ・楽しそうだという下位尺度であり、母親の反応を通して母乳育児を捉える父親の意識がうかがえる。

このように母乳育児の満足や利点、そして簡便さについては、母親にも父親にもみられる因子であるが、母親では母乳育児を経験するなかで生じてくる意識がふくまれていくのに対して、父親は母乳育児をする母と子を見守り支えるという経験のなかで生じてくる意識となる。母親の満足は、母乳育児の実践そのものの中で捉えられる。つまり、母親にとっては母乳育児における楽しさや幸福感といったものは実際に体感できるものであるが、父親は、母親あるいは子どもの反応といったものから間接的に感じとれる満足感であって、父親が母乳育児の主体とはなり得ない点による相違である。

母親の意識が、実施者である自分自身と、子どもとの相互作用に向くのに対して、父親の意識は、母親の思いや子どもへの利益といった拡がりをもつことが示された。

母乳育児について、母と子の二者関係を包み込む形で、父親の意識が存在していることが示唆される。母と子のきずなという感覚的なものを体感できにくい父親に対しては、より具体的に言語化して認知できるような指導方法が望まれる。これは身体的性差によって、父親が母乳育児の主体となり得ないことによる。

また、因子にふくまれなかった項目をみると、父親は母親の入院中の状態や実際の母乳育児の方法については知る機会が少なく意識化し難いといえる。分娩後の短期間の入院生活では母と子が看護ケアの主な対象となりやすい。しかし父親に、乳汁分泌の神秘性や具体的な支援方法などについての情報提供をしていくことが、母乳育児をすすめるうえで、今後の課題となるのではないだろうか。

## 3. 質問項目別にみる母親と父親の特徴

質問項目別の平均得点においても、父親よりも母親の得点の方が高い項目が多く、母乳で育てたいという志向も父親よりも母親の方が有意に高い。ここでも母乳育児の主体である母親の特徴がうかがえると同時に、母乳育児を望む母親の思いが再確認できる。母乳育児が簡便で楽しいものであり、母子相互作用のなかで、母親としての満足感と幸福感を実感できるような支援が必要である。

また、母乳育児を支えることは夫のつとめであるという意識は、母親よりも父親の方が高く、特に核家族世帯が家族形態の多くを占める現代の育児背景において、育児の協力者あるいは担い手としての父親の意識の高さがうかがえる。

母乳が安心して飲ませるべきものであること、そして母乳育児が自然なことであるという意識は母親にも父親にも共通して強くみられるものであり、母乳育児を支援するためには、母親が楽しさを実感できるような具体的な支援が望まれる。

## V. 結語

母乳育児に対する母親と父親の意識は、共通するキーワードをふくみながらも、異なる因子構造が示された。母親の意識が、実施者である自分自身と、子どもとの相互作用に向くものに対して、父親の意識は、母親への思いやりや子どもへの利益といった拡がりをもつことが示唆された。父親が母乳育児の主体とはなり得ない点による相違と考える。

母乳育児は母親と子どものみを主体とした支援となりがちであるが、父親は母乳育児を支えることは夫としてのつとめであるという意識をもっていることがわかった。入院期間中も、父親が間接的に母乳育児に関われるような支援が望まれる。

(本論文は、一部要旨を第48回日本母性衛生学会学術集会で発表したものを加筆・修正した。)

## 引用文献

- 1) 下川さえ子：エモーショナルサポート，母乳育児のコンセプト，小児保健協会：50-54, 1999.
- 2) 神崎文子：子育てと夫婦の関係，教育と医学，48(8)：43-49, 2000.
- 3) 厚生労働省心身障害研究：少子化時代に対応した母子保健事業に関する研究，1995.
- 4) 川井尚：育児における父親の役割－その現状と今後の課題－，生活教育，46(6)：7-13, 2002.
- 5) 二宮恒夫：母乳育児と父親の役割，小児保健研究，54(1)：66-69, 1995.
- 6) 服部律子：0～2歳児の父親の家事育児行動と母親の健康との関連，母性衛生，43(1)：43-50, 2002.
- 7) 加未恒壽：夫婦の意識が相互の育児不安に及ぼす影響，母性衛生：546-548, 2002.
- 8) Kendall, T. K.: Breastfeeding and the sexual abuse survivor, Journal Human Lactation, 14(2)：125-130, 1998.
- 9) 野口真弓：母親の気持ちを支える母乳ケア，日本助産学会誌13(1):13-21, 1999.
- 10) WHO/unicef: From Protecting Promoting and Supporting Breast-feeding. A joint WHO/UNICEF Statement, 日本語版「母乳育児の成功のために」日本母乳の会：1989.
- 11) 母子保健事業団：母子保健の主なる統計：146, 2006.
- 12) 前掲11), 131, 2006.
- 13) 岩井弥生，川由京子：実母の母乳育児意識と褥婦の混合栄養育児移行との関係，助産婦雑誌55(6)：73-78, 2001.
- 14) 南部春生：母乳育児の変遷とその理念，母乳育児のコンセプト，小児保健協会：3-8, 1999.
- 15) Janke, J. R. : Development of the breastfeeding Attrition Prediction Tool, Nursing Research, 43(1)：100-104, 1994.
- 16) 本郷寛子：一人目の母乳育児がうまくいかなかった経験を持つ母親への援助，助産婦雑誌，56(7)：16-21, 2002.

